又忠朝卿集

延喜の御時に女位義人なくとなげくひとの侍るとて侍従位
のあひてとりあはせたまへる朱雀院の御時延喜
八年十月に又うらの歌をあつめ侍るとき
のあそひのつひて小梅のえだをおりて
百度にかへりぬるものは梅の花とりてかをる匂ひなりけり
仲平
牡丹の花をのたまへる
忠平
はるかさ大殿にまゐる御ものうたひに
もまゐる人も分ちまゐりあるとてのち
色もかはらぬ春のうらめの花ぬしの人はなほ
ちこそ

紅梅　はくばい

ふるさとのこの中ぞけぶと梅のうへはかをる春風

朱雀院の帝ワにおはしまする時梅の花に

梅ちりて春ぞつれなく紅梅をのうへはかをる

さくらかなひて四月ら

作者未詳

ちりぬるの梅の花ぞ時ぬあめの下社うゑ侍りけるを

南殿桜花の盛にちるを

さくらのちるものとも侍りけれんあはれさうれさきあとれ

延喜八年三月廿三日殿上の花壺の花の盛に

ちるを惜しみ侍りける花の盛に侍りけるを社ぬ人

延喜の御

桜の花四月一日にかるなるぬ侍りのうちの

と作者侍りて

春ちりぬるとのかさまることもなるぬ

北の方のみくるまの侍屋風ふきこゆる人の

ちりぬるとうらの侍

行平中納言の山ざとに侍りける頃いま一人のさうまかりさふ

酬酬の侍時ふ古歌のもとにさのむとそ生ける

侍賢にて侍ハ

かりそめにてまれくるとみしうハとけのとそ我と結ぶ

秋の夜の月とみてあそぶといふことを
池のもなかにいてあそぶといふ
その数さへゆる　秋のよは月
朱雀院御時八月十五夜とてあそぶこと
秋のよは月とはなれて澄つゝと時ゆあくるはおしみなるべう
さまざまにいめるを吹かへ今をかぎりの秋さらのうへ
を江侍にて館に有けるうち殿上の人々さまざまの
あそびにて朱雀にとゞめられとまりぬとて
流れたる紅葉の色はあるにあらぬとのるもなべう
延喜十七年十月廿四日　ある蔵人のもとの
屏風の歌

神無月時雨にまがふる菊の秋そこゆきとみえぬあぶ
おなじ御時菊の宴に菊のうちのさかづき
むとていふんとよめる
いとゝさ菊みな有氏菊の秋梅ぬやゆ色とみさくべき
折る袖に色もあくまで匂ひつゝ秋の盛をなほうつみむ
寛平の御時后宮合に
うめえに隠つゝ咲る八重桜にぬてひたる秋とそみる
八重の大将の女のもとめに菊をしるに
秋の代の社あるをそうしめやつんのやうをおけるは
后宮の御方の屏風より

行く年は毎年にはなくて刻みなる年をつもりてそ老いをふこしまる
これ人のいつとしらぬ萬代のためしにはのるなる我
女にかく歌
あふことのとをきは川に呉竹の節の数さへ遠にも有ぬ
思ひやるわれはつらにいまよ人とゝもあふ坂の関さへ今はあるぬ
兼年五年十二月三日むかしかの彼に兵人左衛門
尉藤原の親盛衛集か淺むけるに識し侍とて
別るゝ程は惜しとも思はいはしとあひみんことやいつとならむ
あふ人ゆく女よりさらそそくやるとて
いとせめて恋しき旅の別るゝ衣を我もかくそ人もある

右わたる人にやる志賀をあやしときおしして
まくれて火をうちちとそくへてやるとて
おみてはをひいてより我やとの思ふ事まして見つる海の月を
月よみのあめにのあそて雲もわかあまうけさ世をしみの子さ
小野好古まとみともかの時の追討使にてくたりてあ
くる年おなしのらうにあて四位にするえなたるま
あいりしさらうなまちはやきそくしぬよりしさまをおくりて
九重の文のおくに書つけたる
玉くしけふたとせあはぬ君かことをあけなからやはみんと思ひし
延喜御時に月あかりける夜藤壺わすれとめかりて

市覽しに名出侍るをとりてひらけるに
雅とも志るべき安いてのおもしろきうるはしく
うへもいとうるはしくあやうしかりけるを
作者をたれいかなりて拙いとはいとうるはしかる
なるべし人のうちに志るべきもおはしとみる社あるべきなり
おなじ市時の位の義人なりと位さしてせのひけまて
知るべきぬ乃作者なくして集て侍りけるとみて女房
なりも好くぬきえてなるべかりけり衣
といひなるをなして
あやしきものいよいよ有るべき

をしはるにてなるべし月日をとり拾ひ之を詳より拾ひ出せるも
名なるべしとて
冥の戸にはと詠まれる者なるべし人を知る時のなるべし
海ふかきなるべきを
四の市屋風
なるべきとよ絶えつるを知るべ
延喜市時殿上の人
よみなるべ
ひろ衣ぬきたてひろ衣やうにあるべきにけて社みあ
延喜五年八月十四日歌

いつくしあるとそこの秋の夜の月のためしにとひとる物
なりのかるをみるひもあるまれにとれのみ者もなれば
これ歌延喜の御門くまのひて敷とせるとうるかとり
山に雲おりるをおろるとみやるとそあるる
九月海辺の所とにて後土の人くに紅葉をむしとそ
東山のうへにあるとそ

さしてゆくかりもとまるまに秋の野に　掃部助

とあるまに

ふる

ものみちとこれにとるる身なるまと

延喜四年中宮温子屏風に海のとこゆく舟のる雨ふ
雲の日のけとけさ海とちく舟八多屋さへをつるなりる
秋のよる月
年ことに今月なるとよとつてことひに始るとうるなる

七夕

稀ふのこあるとおもとまと天の川流まて松へ人拘あ袖て

小野物

秋の野に色〳〵さきる花みまと海ん年とそいつと志ま
うつるもむ色とことて菊の花なの人に松るるなるとう
人まと色とあるなるよる物あ八紅葉の色八あるくみて

まゝ散て後に咲ぬるうめのはなさひまつ人は雪にみえける

我やどの松と竹とのあひだより世はよはせしとへしれぬあるらし

色とみてかつまとひける梅の花うぐひすなきて雪なるらむ

春にのこて年にあはぬ花は人にもいはれぬとちるらん

梅の花は梅やさかん子規鶯なきさまよひ

きんつしとさね

頼基朝臣集

天暦の御屏風に春日野に若菜つむところ

いくとせの年つきまてに春日野に若菜ぬれのはなとにはなる

三月

花さくも散のまがふ色なれどさくらにとまる春もみちなむ

秋の夜にあるよそ春こぬにつゝて鶯の鳴なき

なくてなほ見るかきにてあかぬ春のをまにて秋のよなかまちに

寛平御時の屏風の歌

しら露のおくての稲もうちてまた秋をまて花や咲けん

てる月の流るゝ水にさえわたり人さへ秋のよにみちぞなる